

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00170

研究課題名（和文）中国文人山水画にみる倣古と実景描写の相克と止揚 - 元初確立期から明末董其昌への展開

研究課題名（英文）The sublation of the conflict between representing nature and imitating old styles in Chinese literati landscape painting from the early Yuan to the late Ming

研究代表者

宮崎 法子 (MIYAZAKI, Noriko)

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：20135601

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：中国絵画史の主流をなした文人山水画の重要な要素である倣古と実景描写が、作画に与えた影響を、董其昌と石涛という倣古主義と実景主義を代表する画家を中心に、各時代の代表的な画家の作品を取り上げ、実在の景との比較を含む作品の様式的分析を文献資料を参照しつつ進めた。それを通して、倣古が画家の文化的環境に大きく依存し、古画鑑賞機会に恵まれ古画に学ぶ機会を得ることが文人画修得の前提であり、特に大画面山水を構成する基礎となることを確認し、一方、山水画の本来的な要素である実景図は、古画学習機会の乏しさを補い、時に山水画に新たな展開を促す役割を果たしたことを、実際の作例によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文人山水画は、中国文化そのものの本質に深く根ざした芸術である。元来、山水画は実在の景と不可分であったが、伝統的な尚古主義と典故主義が文人山水画にも影響を与え、文人山水画における倣古主義が決定づけられていった。本研究を通じ、画家の環境における古画学習機会の多寡が、作画における倣古や実景描写に大きく相関し、特に絵画の裾野が拡大した明末以後、その寡少が実景山水や個性的山水様式の創造を促す要因となったことを示した。それは、文人山水画の確立期であった元代文人画家や遠く日本の南画家の作画をも包括した文人画研究にも応用可能な視点であり、文人画を普遍的な芸術活動として考察するための道筋を拓くものである。

研究成果の概要（英文）： The depiction after the old master styles and the representation of real scenes are major elements of literati landscape painting. This study examines the mutual influences of these two elements on literati painting, focusing on Dong Qi Chang who advocated the importance of study of old master styles in literati works and Shi Tao who denied that and valued the depictions of real scenes, as well as landscape works by representative literati painters such as the Four Masters of the Yuan Dynasty, and the Wu School of the Ming Dynasty.

As a result, it has become clear that rendering after old master styles was heavily dependent on a painter's cultural environment, and that having opportunities to view and study old master paintings was a prerequisite for acquiring literati landscape painting, while depiction of real scenes played a role in making up for the lack of opportunities to study old master styles and encouraging to make new developments of landscape painting.

研究分野：東アジア美術史

キーワード：文人山水画 倣古 実景描写 董其昌 石涛 王原祁 古画学習 南画と中国文人画

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 従来の日本の中国絵画研究と文人画研究の状況と課題

日本における中国絵画研究は日本に伝来した宋代の仏画、南宋の宮廷画家や禅僧の作品、明代の職業画家浙派の作品を中心に行われ、中国で尊重され日本には伝わらなかった文人画の研究は進んでいなかった。一方、江戸時代後期には、画譜や書籍、あるいは来舶清人の作品などによって情報がもたらされ、日本に文人文化・文人画ブームが到来した。日本人画家による文人画様式の絵画(南画)は、幕末から明治時代にかけて、日本の絵画の主流であった。開国後は、中国から本格的な作品ももたらされ、中国文人画の蒐集や南画の盛行は、近代を通じて、昭和初期まで続いた。だが、それは、西洋文明によって近代化を推進し、日本独自の文化や美術を顕彰する立場からは、克服されるべき旧文化と映り、近代的な美術史研究の対象にならなかった。お雇い外国人学者として来日し、日本美術を世界に紹介したフェノロサは、"Epochs of Chinese and Japanese Art"(1912, London)において、文人画を痛烈に批判し、「宋代までの理想的な美術」を、16~17世紀の文人画が「野火のように灰燼に帰させた」と述べた。フェノロサ的な美術観に従って推進された近代的学問としての美術史において、文人画は対象から除外され、その研究は、漢学者や中国文学研究者の手に委ねられ、文字資料に基づく画人伝研究が進められた。

文人画の作品研究を難しくするもう一つの要因として、文人画の贋作の多さを挙げることができる。明代における文人文化の裾野の広がりにもなう中国の美術市場の爆発的な拡大によって、様々なレベルの贋作が流通するようになり、日本にもその一部が輸入されたことは、先述の江戸時代の文人画ブームの一助となった。だが、贋作が溢れる一方、政治的な理由によって、台湾や中国所蔵の膨大で重要な作品の公開が20世紀後半以後にまで遅れたことは、美術史研究にとって致命的であり、様式分析による近代的美術史研究が遅れた大きな要因でもあった。(論文2.宮崎「研究回顧」)

### (2) 文人山水画を読み解く2つの鍵としての実景描写と倣古

報告者は、かつて、清の石涛の「黄山図巻」(泉屋博古館)や「瀟湘臥遊図巻」(東京国立博物館)や「西湖図」(上海博物館)など南宋から元にかけて江南で描かれた実景図について、実際の景観と作品の比較や作画の背景の考察などに基づく研究を行ってきた(宮崎「西湖をめぐる絵画」(梅原郁編『中国中世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、1984)、「上海博物館蔵『西湖図巻』と北京故宮博物院蔵『西湖草堂図巻』」(『実践女子大学美術史学』16、2001)、「『瀟湘臥遊図巻』から趙孟頫へ」(『実践女子大学美術史学』28、2014)、「石涛と黄山図巻」(泉屋博古館紀要2、1985年)。それらを通じて、当時の文人の交流(雅集)において、実景山水図が重要な役割を果たしたことや、当初は職業画家の実景図が用いられたが、やがて、元代の江南において文人自らが描く文人山水画が確立し、中国絵画の主流になったことを示した。文人山水画においても、実景描写は重要な要素であったが、その継承発展のなかで、先人の名画に学び、その様式を用いる「倣古」の要素が、文人画において重視されるようになった。それは、中国の文人画を特徴付ける特徴と考えられるが、一方、近代においては、それが中国の絵画芸術の形骸化を招いた要因であるという見方も存在する。

いずれにせよ、中国の文人山水画を考えると、倣古の問題を抜きに語ることはできない。倣古と実景描写は、中国の文人山水画を考える際の二つの重要な鍵となるものである。本研究は、この二つの要素に注目し、文人山水画を美術史研究の対象として、読み解くものである。

## 2. 研究の目的

宋代以後中国絵画の中心的ジャンルとなった山水画は、当初、実在する景を再現的に描き伝える実景描写に主要な役割があった。一方、元代江南で確立し、その後中国絵画史の本流となった文人山水画では、古画の様式に倣う「倣古」が、作画上の重要な要素となっていった。一見相反するこの二つの要素は、文人山水画において、具体的にどのように相互に係わりながら作品に反映し、またそれぞれの時代のなかで、どのように文人山水画の展開をもたらしたのかを、作品に基づいて考察し、明らかにすることが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

「研究の背景」で述べたように、近代的な美術史研究の作品の様式分析に基づく文人画研究は未だ十分に進んでいるとはいえない。一方、主に中国や台湾の研究によって積み上げられてきた、新出資料を含む作品に関する文字史料による、画家の生涯や行状についての研究は、近年飛躍的に進んだ。それらをふまえた上で、本研究では、日本の美術史研究が得意としてきた作品の様式分析や、これまで報告者が行ってきた、描かれた実際の場所の調査を生かし、実景と作品を対比させ、関連の文献資料を援用することで、実在の景が絵画にどのように反映されているのか、或いはないのか、また、倣古が創作活動にどのような意味をもったのかという視点から考察した。それを通じて、伝統的語彙の枠内で、観念的に語られる傾向が強かった中国の文人山水画を、普遍的な創作活動として語るよう試みた。

具体的には、文人画における倣古主義を決定づけた明末の董其昌と、その系譜を継承した清初の正統派の王原祁、倣古否定し実景に学ぶことを公言した個性派の石涛について対照させながら考察し、遡って、明代呉派の沈周と文徵明、元の趙孟頫や元末四大家など、各時代を代表する文人画家の、実際の地を題名に冠した作品を取り上げ、現地調査や文献資料によって、実景との比較、作品相互の比較、画家の言説や環境などを総合的に分析し、実景と倣古の二つの要素が、それぞれの作品にどのように影響したかを、具体的に明らかにした。それらの成果から、倣古と実景描写が文人山水画の制作の場で、時代により、また画家の立場などによって、どのような意味をもち、どのように変化したのかを把握した。

また、本研究期間中が、コロナ禍に重なったため、中国での現地調査や海外での作品調査が行えなかった間に、幕末から近代に活躍した日本の南画家の作品調査を行い、当時、中国の南画家が、限られた情報のなか、どのように中国文人画を学び、倣古画法を試み、また日本の景をどのように描いたのかについて考察した。

## 4. 研究成果

各時期の代表的な画家の実景的作品を主に取り上げて、研究を進めた結果、文人山水画における倣古と実景描写に関して、以下のような知見を得ることができた。

董其昌の初期の代表作である同郷の友人陳繼儒の別業を描いた「婉孌草堂図」(台湾個人蔵)についての考察から、倣古主義の権威とみなされる董其昌画にも、実際の景に即した実景要素が反映していることを指摘した。そして、その前例をみない特異な表現は、まだ科学合格から間もなく、規範とすべき多くの名画を実見する機会が未だ十分でなかった時期に、実景からのインスピレーションによって描くことで可能になったと考察した。(論文 8: 宮崎「董其昌山水画における実景表現」)

また、董其昌を受け継いだ清初、正統派の王原祁と、同じ年の個性派の石涛の作画を対比させながら考察した結果、石涛にとっての実景の重視は、彼が王原祁のような文化的に恵まれた環境になく、優れた古画に学ぶ機会に乏しかったことと表裏の関係にあり、それが石涛の個性的な作画を促したことを指摘した。一方、そのような環境で、石涛が、正統派のような安定した大画面山水図の構成力や筆墨法を身につけることは、困難があり、石涛の筆墨法や画風の振れ幅の大きさも、石涛のそのような環境から説明できることを示した。また、特に大画面山水の構成力は、宣城から南京、さらに北京へと移り住むなかで、古画や正統派の作品を見る機会の増大によって、獲得されていったことを、時期ごとの状況と作品の分析を通じて明らかにした。(論文1:宮崎「文人山水画家の倣古と個性 王原祁と石涛の軌跡とその交差を中心に」)

一方、元末四大家の作品を身近に見て、その画風に学んだ沈周を領袖とする明中期の蘇州の呉派において、元末四大家を古典的規範とする文人山水画の流れを、方向付けることになった。ただ、彼らの間では、別業図や紀遊図など、実景に即した作画が盛んであった。例えば、沈周が友人の呉寛の父の別業を描いた「東荘図冊」(南京博物院)には、直接的な倣古の要素よりも、実景要素と沈周独自の力強い筆法の確立が見られる中年期の代表作であることを論じた。(学会発表など1「中国絵画の15世紀」、著書2分担執筆「呉門早期の別業図」)一方、沈周は、倪瓚に倣う倣倪瓚画を多く残しており、実景描写と倣古図は、それぞれ別の目的や役割をもつものとして、描き分けられていたと考えられる。

呉派によって文人山水画様式の古典となっていた元四大家や、元初の趙孟頫など、文人山水画確立期の文人たちも、多くの実景山水を描いた。なかでも、黄公望の現存作品には実景山水図が多く、倣古図はほとんど見られない。それは、彼が他の三人のような恵まれた文化環境になかったこととの表れと考えられる。四大家のうち、従来その貧しさが強調されてきた呉鎮は、実際は南宋の宰相や后妃を輩出した家系で、海運業などによって経済的文化的にも恵まれていたことが近年明らかになった。実際、呉鎮の代表作「漁父図巻」(フリーア美術館)は北宋の荆浩画に倣う倣古作品である。しかし、それは、北宋の写実主義とは全く異なる新しい文人画の境地を開いた斬新な作品であった。一方、黄公望画には、倣古画は見られず、「富春山居図巻」(台北故宮)や「天池石壁図」(北京故宮)などの代表作はいずれも実在の景を描き、友人に贈るための作品である。そのことは、黄公望が優れた古画を参照する機会に恵まれなかったことを示唆するが、黄公望の「富春山居図巻」は、実景描写を通じ、筆墨の心地よさを伝え、中国文人山水画の金字塔と目されている。呉鎮と黄公望のこれらの作品に見られるように、倣古と実景描写は、いずれも画家の個性と結びつき、創造の源となりうるものであった。

以上のように、文人山水画を元から清初まで、作品に即して考察した結果、文人山水画の画法の修得には、すぐれたコレクションが身近に存在するか、直接に優れた文人画家に学べる環境(二つは重なる場合が多い)が不可欠であることも確認できた。それは、非常に稀な僥倖といえるもので、文人画が、元から明にかけて、江南の限られた文人たちの間で育まれてきたという事実も、そのことを証左する。一方、古画学習機会の乏しさは、文人山水画の新たな展開や個性的な創造を促すものにもなった。

文人山水画を特徴付ける倣古は、中国文化や文学における典故主義と深く係わっているとの指摘がある。だが、一点物の絵画は、文字や口伝で伝達可能な詩文とは大きく異なり、参照できる者は限られていた。明末の文人文化の拡大のなか、それを補完するように、画譜やマニュアル本が出版され、また当時大量に流通した贋作も、限界はあるものの、文人画様式や古画の画風を、

ある程度伝える役割を果たした。それが、江南都市の個性派の画家たちの登場の背景にあり、また、日本の南画家たちの活動も可能にした。(論文：3「落花遊魚図 劉棗から惲寿平へ、そして椿椿山へ」、5「橋本青江の画業について初探」、4「波多野華涯の作品」、6「自然を絵にする伝統」、9「波多野華涯蘭竹図屏風解説」「蘭竹図六曲一双屏風題詩・款記・印章の釈文と訳」著書：4重田みち編『「日本の伝統」を問い直す』分担執筆「日本美術の向こう側」)

石涛を代表とする江南都市で活躍した清初の個性派の画家たちは、正統派のような恵まれた条件を持たないことで、かえってその個性が発揮されたのである。おなじことは、日本の南画家たちの独自の作画についてもいえるだろう。

文人画における倣古は、古典様式の修得に深く関わっていた。それを踏まえた倣古的作画には、空間の構成力や安定した筆墨法が備わっていたが、その殻を破る新たな個性の発現との相克は、時代や地域を越えて創作の現場に常に立ち現れる普遍的な現象といえる。

本研究において、中国文人画において前提ともいえる過去の名品の参照機会の少なさが、山水画本来の実景描写を通じて、独創性や個性の表出に繋がったことを明らかにした。

だが、一方、倣古と実景は、必ずしも相反するものではなく、中国文化において、復古が新たな芸術上の革新を生み出すたびに提唱されたことも、よく知られている。文人山水画における倣古も、本来そのように機能しており、代表的な文人画家たちの作品分析からも、濃淡強弱はあるものの、倣古が画家の個人様式に取り込まれることで、実景描写とともに個性的創造を促す原動力となっていたことが指摘できた。この点については、今後、さらに具体的な作品についての考察を進め、その成果を発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 宮崎法子	4. 巻 38
2. 論文標題 文人画家の倣古と個性 王原祁と石涛の軌跡とその交差を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学	6. 最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/0002000075	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎法子	4. 巻 37
2. 論文標題 研究回顧 中国美術史研究史私史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1177.00002395	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎 法子	4. 巻 36
2. 論文標題 落花游魚図 劉案から惲寿平へ、そして椿椿山へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002354	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎法子	4. 巻 1
2. 論文標題 波多野華涯の作品	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学香雪記念資料館「波多野華涯の世界 - 女性文人画家の明治・大正・昭和」	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎法子	4. 巻 20
2. 論文標題 橋本青江の画業について初探	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学香雪記念資料館館報	6. 最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/0002000004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 法子	4. 巻 1
2. 論文標題 自然を絵にする伝統	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田千秋美術館展覧会図録『絵になる自然』	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 法子	4. 巻 33
2. 論文標題 董其昌山水画における実景表現 - 婉レン草堂図を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮崎 法子	4. 巻 426期
2. 論文標題 従傳至日本の作品看明代的「偽好物」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 故宮文物月刊	6. 最初と最後の頁 4-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎法子	4. 巻 1
2. 論文標題 波多野華涯「蘭竹屏風」解説、「蘭竹図」六曲一双屏風題詩・款記・印章の釈文と訳	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 浜口陽三と波多野華涯 - 匂い立つ黒と黒	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 宮崎法子
2. 発表標題 中国絵画の15世紀 蘇州の復興と花開く文人の芸術
3. 学会等名 京都国立博物館 夏期講座『転換の時代15世紀』（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎法子
2. 発表標題 中国文人画たちの古画学習と個性 倣古と個性の間
3. 学会等名 実践女子大学美学美術史学科講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎 法子
2. 発表標題 上海博物館蔵 西湖図巻 与北京故宫博物院蔵 西湖草堂図
3. 学会等名 海上千年書画国際研討会（上海博物館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 宮崎法子
2. 発表標題 日本絵画の向こう側 - 中国絵画史からの視点
3. 学会等名 人文研アカデミー「『日本の伝統文化』を問い直す」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎法子
2. 発表標題 從 婉luan草堂図 看董其昌的“以天地為師”
3. 学会等名 董其昌書画芸術国際研討会(上海博物館)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 重田みち編 分担執筆 宮崎法子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 504
3. 書名 「日本の伝統文化」を問い直す 第10章「日本美術の向こう側 中国文化圏のなかの日本美術」	

1. 著者名 宮崎法子・森雅秀 編著 総論執筆、文人山水画に係わる中文論文の翻訳 2	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 692
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア 元・明・清	

1. 著者名 湯志波（主編）分担執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人民美術出版社（中国）	5. 総ページ数 242
3. 書名 耕石他山 海外沈周研究論文集 宮崎法子「吳門早期の別業図一以沈周「東莊図冊」為中心	

1. 著者名 宮崎 法子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 736
3. 書名 中国絵画の内と外	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	星野 鈴 (HOSHINO SUZU)	東京造形大学・造形学部・元教授	
研究協力者	吉田 恵理 (YOSHIDA ERI)	静嘉堂文庫美術館・学芸員	
研究協力者	内山 智恵 (UCHIYAMA TOMOE)	浜松市美術館・学芸員	実践女子大学大学院博士後期課程院生

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	范 我聞  (FAN WOWEN)	実践女子大学大学院・前期博士課程（修士課程）・修了生	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関